快男子 (111)

大島伯鶴演　今村恒美畫

盛會

その翌朝、岩造は何を思つたか出入帳のおよしの家を尋ねながらやつて來た。あすこがおよしの家だといふところまで來ると、いきなり格子を開けて出て來たのは、身の丈の勝れた立派な巡査。一目見ると岩倉岩造、思はずも物陰へ隠れてしまつた。巡査はそれには心付かず行き過ぎてしまつた。

啓『あれは仁禮半九郎だ、彼奴がこんなところにゐやうとは思はなかつた。彼奴は西郷さんと一緒に陸軍の中尉の職を辭して、鹿児島へ歸つて、西南の戰爭が起つた時も、賊軍に入つて、西郷さんは城山で腹を切つたといふのに、仁禮半九郎は脱走をして、行方が知れなくなつたといふことだつたが、この大阪で巡査をしてゐやうとは思はなかつた。およしの家から出

もといふのは、あの人かね』

よし『さうですよ』

啓『へツへ、すイおよしさん、お前は恐い事をいつたな、先は陸軍中尉仁禮半九郎が何日から岡田又藏と名を變つたね』

よし『エッ……』

啓『何もそんなに驚くことはねえ、乃公は東京にゐた時、二三度見て知つてゐるんだ。仁禮半九郎といへば、西南戰爭の時に、賊軍の方の隊長で、城山を脱走をしたといふことだが、その仁禮半九郎が、何日の間にか岡田又藏といふ名になつて、今は警察の巡査をしてゐやうとは、古い文句だが、お釋迦さまでも氣が附くめえ。お前も良い亭主を持つてお仕合せだ』

よし『仁禮半九郎だつたら、旦那どうしようと仰しやるんです』

啓『どうも斷らもねえ、賊將でも

て來たが、およしの亭主の友達か——何しろ行つて樣子を聞いて見よう』

胸に問ひ胸に答へた岩倉啓造、およしの家の前、ガラ／＼と格子を開けて、

『御免なさい』

『ヘイ……』およしが出て見ると、岩倉啓造がニヤ／＼笑ひながら立つてゐるから、

よし『アレ岩倉さん、何だつていらしつたの、あなたなどのいらつしやるところぢやありませんよ』

啓『朝ッぱらからポン／＼いひなさんな、昨夜の詫に來たのだ、御免よ』

ズイと上り込んでしまつたから、まさか追出すことも出來ませんから、およしは苦い顏をしてゐる。

啓『今日はお前さんの御亭主に逢つて、詫をしようと思つてやつて來たんだ、御主人は……』

よし『今出て行きましたよ』

啓『それぢやアいまこの先で會つた丈の高い巡査が、お前さんの御亭主か』

よし『さうですよ、良人のゐないところをつき止めてお出でになつたんですか』

啓『そんな皮肉なことをいふものぢやない、それぢやア岡田又藏さ

その行方を捜査してゐる人物だ、乃公が訴へて出れやア直ぐに捕縛されるまでさ』

よし『エッ……』

啓『だが乃公はそんな野暮なことはしたくねえ、賊將につけこむ譯ぢやアねえが、およしさん、お前さんその氣になつてくれりやア、乃公もこの藏口を拭いてゐようぢやねえか、どうだ』

よし『その氣つて……』

啓『白ばくれるものぢやアねえ、お前さへウムといつて、乃公のいふことを聞いてくれりやア、この儘默つてゐようといふのだ』

ぞツと寒の音をさせたおよし

よし『折角ですが、いくら馬鹿な女でも、良人を質物にして、姦通などをするやうなことは、妾等が嫌つたつてしませぬよ』

啓『それぢやア何所までも強情を張るのか』

よし『醜い者いぢめも大概になさいよ、立派な商人がごろつきの眞似をしない方がいゝでせう、早く歸つて下さい』

啓『さうか、ぢやア仕方がねえ覺えてゐろ』

およしを睨めつけて啓造は出て行つた。

祝時局下の愛國朝鮮大展覽會

濟州邑

朝鮮殖產銀行濟州支店

濟州邑 角健輔

濟州通運株式會社

濟州產業組合

濟州邑 朴寓璘

濟州邑 崔元淳

濟州島 金寧公立尋常小學校

濟州島 大靜公立尋常小學校職員一同

濟州島 摹瑟浦金融組合

濟州島摹瑟浦 邊太祐

濟州島摹瑟浦 太田鑵詰工場

濟州島摹瑟浦 協成商會

全南道議 康性益 濟州島西歸浦

濟州島城山面

濟州島漁業株式會社 林兼濟州島出張所

濟州島農會

竹中新太郎商店 翰林工場

濟州島大靜面

濟州島翰林面

濟州島 翰林西尋常小學校職員一同

濟州島 全南道議 辯護士 梁洪基

濟州郵便局

濟州漁業組合

濟州金融組合

濟州島翰林面 李時炯

翰林 太田鑵詰工場

光州郡

全羅南道立光州醫院

全南日乃出自動車株式會社

光州商工會議所

全羅南道農會

財團法人全羅南道山林會

光州土木建築協會

光州府

光州製氷株式會社 電話 販賣部一四九番 製造部一〇一四番

南朝鮮興業株式會社

○商談の御用は先づ當館へ！ 全羅南道商工獎勵館 電話五二一四番 ◇お土産には是非道產品を！

全羅南道水產會

光州金曜會

朝鮮金融組合聯合會 全羅南道支部 道內各金融組合一同

(木) 穀物協會

紅繪曼荼羅(108)

海音寺潮五郎作
富永謙太郎繪

人生のからくり(三)

三五郎は、足許に蚊遣の土器を並いて、寝そべつてゐた。一杯やつてゐたと見えて、枕許には、銚子と盃をのせた盆が置いてある。

「どうしたい。何があつたんかやねえか」

「うゝん。別段なこともねえが、…」

日伊國際放送

午後八時ローマより

ラヂオ

八日

第一放送

支那の河